

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

2011年12月13日に長崎教会管区が岩手県大槌町に開設した「カリタス大槌ベース」が、3月31日をもって閉所しました。また、2011年12月23日にさいたま教区が福島県いわき市に開設した「いわきサポートステーション『もみの木』」が、4月末をもって閉所となります（いわき市内での活動は、引き続き行われる予定）。閉所を前に、大槌ベースでは閉所式を、もみの木では閉所「感謝の集い」が行われましたので、ご紹介します。また、カトリック札幌司教区より、2018年4月からの活動の方向性について司教文書が発行（2018年2月16日付）されたことを受け、札幌カリタス宮古ベースより活動のふりかえりと今後の活動についてご報告をいただきました。

年月の経過とともに支援や活動の方法も変化していきますが、これからもそれぞれの場所で出来ることを続けてくださることに感謝しております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

さまざまな思いを胸に——大槌ベース閉所式

カリタス大槌ベース 菊池美佳

長崎教会管区の拠点として活動していたカリタス大槌ベースが3月12日、6年余りの活動を経て閉所式を迎えました。

当日は、晴天ではあるものの冷たい風が強く、会場となりました「ビジネスホテル寿（以下「ホテル寿」）」の屋上では、ことさら強く感じました。「ホテル寿」は、震災後、大槌ベースの最初の拠点となりました。町の復興計画のために一度解体となりましたが、もとの場所から川沿いに500メートルほど移動した場所に新築され、2015年10月にオープンしました。

大槌町の人的被害は、2月28日現在で、死者1,286名、うち行方不明が417名、関連死が52名となり、震災前の人口の1割が姿を消してしまい、岩手県内では人口規模で1番被害が大きかった町です。「ホテル寿」の屋上から見渡す景色は、震災当時の面影が少しずつ様変わりし、新たな町へと変化を遂げてきていますが、未だ心の復興が落ち着いていない方がいるのも確かです。



「ホテル寿」の周辺には被災した旧役場庁舎が一部分を残し、風にさらされています。この庁舎の解体について、賛否が町民同士でも分かれていましたが、3月の大槌町新年度一般会計予算案にて、解体が可決されました。

「ホテル寿」の屋上には、カトリック教会がない大槌町内で唯一といわれている聖母マリア像があります。この純白のマリア像は、朝日の昇る太平洋に向かって建てられています。カトリック信者であるこのホテルのオーナー道又賢一さんが、津波の犠牲となった方々の霊を慰めるために設置されたものです。特別な名称がないところから、「屋上のマリアさま」「海に向かうマリアさま」などと、親しみを込めて呼ばれています。

閉所ミサには、濱口末男司教（大分教区）、平賀徹夫司教（仙台教区）、神田裕神父（カトリック司教協議会仙台教区復興支援担当）、森山信三神父（福岡教区）、下窄英知神父（長崎教区）、末吉卓也神父（鹿児島教区）、津波古聡氏（那覇教区本部事務局長）、そして大槌ベースの2代目ベース長を務めていただいた川口茂助祭（鹿児島教区）が、駆けつけてくださいました。また、他ベースや全国からのボランティアの方々、町民の方に来ていただき、スタッフ含め総勢40名程の人数でのミサとなりました。

祭壇前には、カリタス大槌ベースにとってかけがえのない存在である初代ベース長故ヨゼフ古木眞理一神父（サレジオ修道会）の遺影を並べました。

強風にあおられながらも、閉所ミサは粛々と行われ、参加されていた方々は、「閉所は残念だが、良い時期なのかもしれない」という言葉や、寂しい気持ちと喜ばしい気持ちの複雑な心境を口にしていました。また、屋上から町内を見渡ししながら「あそこでこんな活動した」「あそこでお買い物をした」「仮設の店舗が新設で再開した」「公営住宅や民家が増えた」など、これまでの活動の思い出話などが聞かれました。久々に顔を合わせる方もいて、近況報告などをなさっていました。

閉所ミサ終了後、青空の下、参加者全員で集合写真を撮りました。現ベース長片岡英和の膝の上には、古木神父様の遺影があり、これまでの活動や関わっていただいた方々を思い出し、温かくほほえんでいるように見えました。



閉所ミサの様子 写真奥には、海や工事中の様子が見える

休憩後、スタッフ2名をガイドに、司教様方をお連れして、町内の視察を行いました。

はじめに旧役場庁舎を見ていただき、現在の状況や200～300メートル離れた海が見えるかといった確認をしてもらいました。震災発生当時、建物の陰になっていたことにより津波が見えず、逃げ遅れて被害にあった方もいます。

続いて、カリタスジャパンからの支援を受けて、2017年度に開所した大槌町教育支援センター、通称「OLAI」（意味：自分の家・学習活動変革）を見学。センターにはカリタス大槌ベースより出向しているスタッフがおり、館内の説明をしてもらいました。平屋の木造作りの館内では、木の温もりを感じながら小中高生が勉強することができます。

その後、小中一貫校の大槌学園へ移動し、校内を松橋文明学園長にご案内いただきました。校内からは、卒業式のための合唱練習の歌声が聴こえてきました。2016年9月に完成した新校舎。それまで子どもたちは、周りの音が響く仮設のプレハブ校舎で勉学に勤しんでいました。

新校舎内では、すれ違う私たちに元気よく「こんにちは」と挨拶をしてくれました。司教様方に、この被災地で元気よく伸びやかに成長している子どもたちの姿を目にさせていただいたことは、大変喜ばしいことでした。

閉所ミサの最中も、大槌では冷たい風が吹いていましたが、その冷たい風は食べ物のうまみを引き締めてくれます。また、3月は春になる前に湿った重い雪が降り、町内を覆い尽くしてしまいます。しかし、次第に暖かくなると、山からの雪解け水は、海に流れ、豊富な海の栄養素となり、豊かな恵みをもたらしてくれます。

大槌町は、未だ雪解け途中なのかもしれません。これまでカリタス大槌ベースに関わっていただいた方々に心から感謝申し上げます。ベースはなくとも今後も大槌町と一緒に歩んでもらえればと願っております。



「ホテル寿」屋上で集合写真撮影

札幌カリタスの歩みと今後の活動について

札幌教区サポートセンター

カリタス宮古ベース担当司祭 上杉昌弘神父

東日本大震災が発生した2011年3月11日直後から、支援活動を始めた札幌教区は、同年4月7日に第1陣が宮古に入り、翌週、岩手県宮古市に「札幌カリタス宮古ベース」を立ち上げました。仙台教区全域を覆う被害の大きさに、札幌教区のカリタスは、「岩手県釜石市までは、仙台教区サポートセンターが関わっているが、もっと北の山田町、大槌町、宮古市までに支援の手が届くのは、まだ先のことになる。それでは私たちが」と、仙台教区の承認のもと、独自に宮古教会をベースにして活動を開始しました。

常設サロンと移動カフェを中心に

試行錯誤の2か月間の波を乗り越え、8月からは仮設住宅で移動カフェを実施するようになりました。9月からは宮古市社会福祉協議会（社協）の依頼を受け、社協主催の仮設でのサロンにも協力し、被災者の方々が集まることのできるよう寄り添い、傾聴しつつ相談事にも対応いたしました。

この活動は当初から現在まで続きました。（今春3月をもってこの訪問の形態は、一旦終了しています。）



【さよならカフェ】 津軽石公民館では、手芸品をたくさんいただきました

ボランティアさんは、『自分にできることはあるのだろうか』という思いで宮古まで来ましたが、私たちを迎えてくださる被災者の方が、とてもやさしくて緊張がすぐに解けてしまいました。そして毎回経験することですが、私が何かお役に立とうとして行っても、かえって力をいただいているのは私の方なのです」と。

宮古教会をベースにして

宮古教会、聖堂をベース事務所として、また、宿泊場所として使わせていただき、毎週、5、6人のボランティアさんが1週間交代で宮古に関わってくださいました。このボランティア募集には、全道に募集要項を配信し、受付、説明会を経て宮古に送り出しました。札幌から宮古までは、フェリーを利用し、車で通いました。交通費の6割ほどを支援しています。

当初、宮古市は他県からのボランティアを受け入れない方針だったので、社協との信頼関係を築くことによってカリタスを認めていただき、仮設住宅訪問を主な活動とすることができました。集会所で手作業などを一緒にしたり、カラオケなどの楽しいことも入れながら継続してきました。

まだ、被災者の方々は、津波被害ですべてのものを失った状態でしたので、「分かち合いマーケット」を札幌教区と全国の皆さまからのご協力で、宮古教会と小百合幼稚園の主催で何回も行いました。そのほか、被災者の方の心のケアにつながる「さをり織り」を行い、今も続いています。



〈宮古教会聖堂〉分かち合いマーケット



札幌を出発するボランティアさん(震災当初)



開始前から長蛇の列ができていた第7回分かち合いマーケット

岩手県4ベースの合同炊き出しバザー

岩手県には、カリタスのベースが4つあります。大槌ベース、釜石ベース、大船渡ベース、そして宮古ベースです。この4ベースが力を合わせて、合同で炊き出しバザーを何度も行いました。宮古ベースの出し物は、いつも、ジンギスカン。これが毎回大好評で、いつも300食準備していても足りなくなるほどです。ちなみに、大槌ベースは長崎チャンポン、釜石ベースはフランクフルト、大船渡ベースはたこ焼きを提供しました。いつも、大好評でした。



アンサンブルグループ奏楽（そら）

札幌交響楽団員が創設した有志の若手音楽家アンサンブルグループ「奏楽（そら）」は札幌カリタスと連携しながら、年に2回聖堂や仮設住宅集会所、学校、病院でコンサートをして、多くの方々の心の癒しとなって喜ばれています。

特に忘れられないのは2016年秋のこと、山田町の仮設住宅集会所でのことです。多くのお年寄りが泣いていました。「震災以来、初めて美しい音楽が心に響いたんですよ」「亡くなった娘を思い出してね」と泣いて話してくださいました。「アンサンブルグループ奏楽（そら）」の行く所どこでも、このようなエピソードが聞かれました。現在も年に2回の公演旅行は続いています。



〈宮古教会聖堂〉



〈仮設住宅集会所〉畳の上での演奏会

世話人制度

活動が続けながら、ボランティアの方々の宿泊場所として、被災者のお世話によって、宮古教会から車で15分離れたところにある佐原地区に2階建ての中古民家を購入しました。また同時に、5人の交代でボランティアのお世話、ベースの管理をする「世話人制度」を作りました。

最初は1人の方に「世話人」をお願いしていました。しかし、支援活動が長期化するにしたがって、1人だけに負担をかけすぎるという反省から、5人の世話人に2週間交代でボランティアさんのお世話、運転、社協との連絡、ベースの管理をしていただくことになりました。これで、1人に責任を負わず、みんなで苦労も喜びも担っていくことができました。札幌では後方支援部(世話人を含む)が支援活動に関するすべてのことに対応しました。



後方支援部の皆さん

上段左から武田さん・芳沢さん・今野さん・上杉神父・和田さん・高平さん・佐藤さん
下段左から宮田さん・岩崎さん・梅原さん・白鳥さん

※この他、井口さん、辻野さん、西田さんが後方支援部として活躍されました。

男性5名は世話人として、女性の方々はボランティア僅少時には現地での活動にも参加され、準世話人と言ってもよいほどにご尽力いただきました。

後方支援

このような活動のすべては、後方で支援を担ってくださった方々のおかげでできたことです。いつも、被災者のために祈ってくださる方々、毎年の活動報告会に足を運んでくださった方々、膝掛けなどを編んで送ってくださった方々、献金で支えてくださった方々……後方支援のすべてを言い尽くすことはできません。本当にありがとうございます。



さよならカフェでのひとコマ



別れを惜しみつつ、みんなで記念撮影

2016年から、活動週を毎週から隔週へと減らしてきましたが、宮古市の社協の意向に添い、2018年4月から、さらに月1週、4日間に縮小いたしました。

これは、今までの札幌カリタス主導の活動から、宮古教会信徒、盛岡市にある3教会の方々との協働による支援活動へと移行していくためです。すでに一昨年からは、地元宮古と盛岡の信徒ボランティアの方が、北海道からのボランティアよりも多く活動に入ってくださいしています。仮設住宅から復興公営住宅への移行が進んできている今、行き場のない方が引きこもってしまわないように願いながら、今後も宮古教会を集会所として利用させていただきながら寄り添いたいと思います。札幌カリタスは、宮古教会、盛岡の四ツ家教会、志家教会、上堂教会の信徒の皆様と力を合わせ協働してまいります。

なお、2016年8月に集中豪雨被害を受けた岩泉町は、いまだ災害直後の様相を呈しており、札幌カリタスへの救援が求められています。継続支援をしていく予定です。皆さまのご協力をお願いいたします。

もみの木閉所「感謝の集い」

仙台教区サポートセンター 長谷川昌子

4月14日、いわきサポートステーション「もみの木」の閉所「感謝の集い」が行われました。

「もみの木」と関わりの深い方々が、続々と集まってこれ、知り合いの顔を見つけては、挨拶を交わしているうちに、「感謝の集い」が始まりました。

午後1時半、ベース長・朝尾光二氏の司会で、まず1分間の黙祷をささげることから始まりました。その後、感謝の挨拶として、最初に仙台教区サポートセンター長・平賀徹夫司教、続いて谷大二司教から次のようなお話しがありました。

～平賀徹夫司教の感謝の挨拶～

2011年3月11日発災直後の16日、谷司教様、菊地功司教様、カリタスジャパンの関係者が、仙台の教区事務所に来てくださいました。菊地司教様から、「さあ、これからはボランティアの方々が全世界から来て、大変なことになりますよ」という指摘を受け、すぐに「仙台教区サポートセンター」を立ち上げました。



この時、谷司教様から「いわき市はさいたま教区の隣なので、いわきに入りた方がいいだろうか」というありがたいお申し出をいただきました。私は、すぐに承知をし、小名浜辺りの支援、物資支援をお願いしましたところ、その後すぐ、さいたま教区から物資を運び、支援してくださいました。小名浜教会から湯本教会にベースを移し、ベース長は、後にもみの木初代ベース長をしてくださった丹弘さんでした。日本各地から来てくださり、湯本教会が拠点になっていました。

そういうとき、谷司教様から、サポートステーションとしてログハウスを建てたいと言われ、このように立派な「もみの木」が建ったのです。この「もみの木」をベースにして、何万人の方が支援に当たっ

てくださったかと考えました。何万人？ いいえ、その背後には、数百万人の方々のお力添えをいただいていることでしょう。本当に感謝しています。

「もみの木」の活動を終えるにしても、助けを求めている人々は大勢いらっしゃると思います。私は、「もみの木」の活動は、「私は、いつもあなた方と共にいる」とおっしゃる主イエスを、どう生きたらよいか、ということを示す学校だったと思います。ここで培ったこの精神を生きていくことを信じています。

最後にベース長をしてくださったグエン・ゴン・ホアン神父様、現ベース長の朝尾さん、ベース長と共に働いてくださったボランティアの方々、スタッフの方々、谷司教様、本当にありがとうございました。



左からホアン神父、平賀司教、谷司教、鈴木神父

～谷大二司教の感謝の挨拶～

私たちがいわき市に入ったのは、震災直後で、まだ右も左も分からない時でした。そのとき、いわき教会の皆さんが案内してくださったので、ボランティア活動を始められました。

私たちは最初から傾聴ボランティアを大切にしようと思いました。いわき傾聴ボランティア団体「みみ」さんにお世話になり、心の重みを少しでも軽くしようと心がけてきました。

避難所、仮設住宅、そして「もみの木」で出会いの場を作ることができたことは、よかったと思っています。私も久々に、高校時代の友人と交流することができました。東京でコーヒーショップを開いている彼が、今日もここにきてくださり、「もみの木ブレンド」のコーヒーを特別に入れてくださっています。

さいたま教区のあちこちから、ボランティアに来てくださった方々、被災者の方々に感謝しつつ、まだ続く復興への道を歩み続けていきたいと思っています。

挨拶が終わると、朝尾ベース長が、この集いに来場された約50人の人々をユーモアを交えて紹介してくださり、その後、全員にコーヒーとケーキが配られ、歓談の時間となりました。

「感謝の集い」には、さいたまサポートセンター長の鈴木國弘神父やセンター長補佐の矢吹貞人助祭、ベース長として、仮設住宅のお茶っこサロンを10箇所に拡大したホアン神父をはじめ、檜葉町の社協の方や「もみの木」の地主さん、いわき教会の信徒など、様々な方が集まってくださいました。



司会を務めた朝尾ベース長（左）



美味しいコーヒーを飲みながらの歓談

「もみの木」のエンブレムを降納するため、全員が外に出て、見上げるなか、「もみの木」に関わった2人のベース長、ホアン神父と朝尾氏により、2階の壁面からエンブレムが降ろされました。すると自然に「蛍の光」の歌声が響き、「もみの木」の閉所を感じたのですが、同時にすぐ拍手が響き渡りました。



ホアン神父と朝尾ベース長によって「エンブレム」が降ろされました

閉会の挨拶は、ホアン神父が、心をこめて話しました。「平賀司教様と谷司教様が協力した結果、私たちが働くことができました。たくさんの方々との出会い、多くのことを教えてもらいながら、寄り添うことの大切さを感じました。その体験を通して、いろいろなことが見えてきました。自分がここまで来れたのは、神の恵みと、たくさんの方々との出会いでした。今日『もみの木』は閉所になりますが、福島の苦しみは、まだ多くの人に知られていないと思います。一人でも多くの人に皆さんの苦しみを伝えることができれば、と思っています」。



ホアン神父による閉会の挨拶



降ろされたエンブレム

最後に記念写真を撮って、参加者の皆さんは、温かい心で「また会いましょう」とお互いに手を振り合って散会しました。



「感謝の集い」が始まる前の「もみの木」



エンブレム降納後、建物前で集合写真撮影